

早稲田大学博士論文(概要)		
2006	学位記	文科省報告
	4274	(甲) 乙 2252

学位論文
4274
2

博士学位申請論文

モンゴル帝国東部における文書行政システム

概要書

船田善之

13～14 世紀，モンゴル帝国によるユーラシアのほとんどを覆う征服と支配は，直接・間接問わず，ユーラシア各地に大きな影響を与えた。近年，いわゆる「モンゴル時代」の重要性が主張され，研究上大きな進展がみられる。モンゴル帝国東部に限ってみても，モンゴルは，長い間南北に分裂していた中国を再統一しただけでなく，雲南・チベット・朝鮮半島などもその勢力下に置いた。この時代は中国史のみならず東アジア史においても大きな分岐点といえる。さらに，当時のモンゴル・中国は，モンゴル帝国の拡大に連動した形で，中央アジア・西アジアから到来した人々を含めて多種多様かつ複雑な民族状況を呈していた。モンゴル帝国の，広大な地域と種々雑多な民族に対する支配のあり方は，現代の多民族国家や多言語社会にも連なる部分もあり，解明されなければならない大きな課題である。筆者は，如上の問題意識のもと，モンゴル帝国東部を中心に，モンゴル帝国の出現によって生じた多民族社会・多言語社会の変容及びかかる社会に対するモンゴルの統治システムについて研究を進めてきた。

本論文では，こうした研究の一環として，モンゴル帝国東部の文書行政システムをとりあげる。モンゴル帝国は，1206 年，チンギス＝ハン Činggis qan がモンゴル高原の諸集団を統合することによって成立した。モンゴルの自称で「大モンゴル国」（イフ・モンゴル・オルス Yeke Mongγul ulus，漢語では「大蒙古国」と表記）という。チンギス＝ハンから第 5 代のフビライ＝ハーン Qubilai qayan の治世に至るまで，東西南北に拡大を続け，その版図は，東は朝鮮半島から西は東欧・西アジアまでを覆った。なお，フビライは中華式の国号として「大元」を採用する。したがって，後代，中国史の枠組みにおいては「元朝」とも呼ばれ，その時代は「元代」と区分される。ただし，同時代のモンゴルの人々にとって，その国号はなお「大モンゴル国」であった。そして，「大元（国）」は，大モンゴル国の漢語による国号であった。近年，モンゴルの視点からこの国家の歴史を把握しようという潮流においては，「イエケ・モンゴル・ウルス」，「大元ウルス」という呼称を用いる研究者も少なくない。しかし，学界においては，長く「モンゴル帝国」という呼称が通行している

ので、本論文においてもこれを採用する。

本論文が対象とする時代は、いうまでもなく、13～14 世紀のモンゴル帝国時代である。なお、研究者によっては、チンギス＝ハンから第四代ムンフ Möngke＝ハーンまでを「モンゴル帝国期」、第五代フビライ以降を「元朝期」として区別する。フビライは、本来ムンフの継承者として正統性を有していたアリクブフ Ariyböke との抗争に勝利してハーン位に即位したとはいえ、結果としては、チンギス＝ハン以来のモンゴル帝国を継承し、フビライの皇統がその正統として認められることとなった。フビライが即位したことによって、モンゴル帝国のあり方が変容したのは確かであるが、国家・政権としては、継続したものであることは間違いない。チンギス＝ハン諸子の王統も西方各地で自立的な政権を建設していくことになるとはいえ、理念的にはモンゴル帝国として緩やかな連帯を保持していたといえる。したがって、「モンゴル帝国期」と言えば、フビライ即位後のいわゆる「元朝期」も当然含まれるわけで、本論文の言う「モンゴル帝国期」もチンギス＝ハン即位の 1206 年から、フビライの皇統が途絶え、名実ともにモンゴル帝国が瓦解する 1388 年までを包括する。他方、かかる制度研究においては、システムの継承・変容を解明する必要から、脱断代史的な視点も不可欠である。したがって、遡っては、フビライ政権が継承した金朝のシステムにも十分留意し、さらに、降っては、元朝を継承した明朝もモンゴル帝国のシステムを継承したことを確認するため、明初までを視野に入れている。本論文の対象とする時代の範囲を緩やかに規定するならば、12～15 世紀となろう。

本論文が対象とする地域については、題目に言明しているように、「モンゴル帝国東部」である。概ね、それは、東アジアと内陸アジア東部に重なる。「蒙文直訳体」（モンゴル政権がモンゴル語の命令文を漢語に翻訳するために採用した翻訳文体）及びそれに関わる問題に関心を有するため、主たる対象は漢語世界、すなわち中国内地が中心となるが、チンギス＝ハン～ムンフ＝ハーン時代も検討対象にしているし、ハラホト文書・『老乞大』・『朴通事』も利用するため、モンゴル高原や高麗も対象範囲となる。

筆者が、多民族社会・多言語社会に対するモンゴルの統治システムの研究の一環として、モンゴル帝国東部の文書行政システムをとりあげるのは、主として、以下の理由による。第一に、文書行政システムこそがモンゴル帝国の広大な版図と多様な地域に対する統治を可能ならしめた重要な要素の一つと考えるためである。第二に、多言語を運用し、さらに独自の翻訳システムを採用していたモンゴル帝国の文書行政自体が、当時の多民族・多言語社会の諸相を反映していると考えられるからである。第三に、当時の漢語口頭語を伝える史料の一部には、モンゴル帝国の独自の翻訳システムが構築した「蒙文直訳体」と共通の言語要素がみられる点による。

如上の問題意識は、モンゴル帝国の統治システム、当時の多元社会や言語接触などへも広がりをもつものである。筆者は、「蒙文直訳体」が何らかの形で当時の漢語口頭語に影

響を与えたものと考えている。しかしながら、このことを直截に示す史料が存在しない以上、史学（制度史・社会史・文化史など）・言語学（中国語・モンゴル語・理論言語学・社会言語学）・文学（中国文学）・文献学など様々な学問領域からアプローチし、着実な論証・傍証を糾合するほかない。以上を踏まえて、筆者は、史学の立場から、本論文において、以下の二つの課題を設定する。

第一に、「蒙文直訳体」の問題である。その成立の歴史背景や受容・変遷の過程については、モンゴル帝国の文書行政において、さらには当時の民族接触・言語接触を考える材料として、極めて重要な課題である。それにもかかわらず、これまで十分に議論されていない。「蒙文直訳体」の解説・語法分析・書式分析が陸続と進められている状況とはすこぶる対照をなす。本論文では、この課題に正面から取り組む。「蒙文直訳体」成立の歴史背景については、直截に述べる記述を欠いているのが、議論の深化に至っていない原因であった。しかし、筆者は、教皇の使節カルピニの描写に注目することにより、そこに、モンゴル帝国の統治者が発する命令を翻訳する方式の原型を見いだす。「蒙文直訳体」の変遷については、従来フビライ政権の施策が劃期であることについては、一致をみていた。筆者は、新出史料を用いることにより、その劃期から過渡期を抽出し、併せてその受容における問題を解明する。

第二に、文書行政システム、とくにその運用面の考察である。上述したように、筆者は、「蒙文直訳体」が当時の漢語口頭語に影響を与えた可能性を想定している。「蒙文直訳体」が公文書に書かれたものである以上、それと口頭語の接点を見いだしたいところであるが、残念ながら、そうした都合のよい史料は残っていない。そこで、「蒙文直訳体」を含め、公文書がどのような場面で口頭語と接触し得たかという点に注目する。この視座に立つならば、命令文書の「開読」（開封して宣読すること）を中心として文書行政システムの運用面を明らかにすることが必要となる。そもそも、これまでのモンゴル帝国の文書行政システム研究においては、文書の書式や、起草過程などに関心が偏っていた。つまり、文書が書かれた後の段階、文書がどのように伝達・発布されるかという文書行政システムの運用において重要な問題が未解明であった。本論文は、この研究上の大きな欠落を補う。

近年、モンゴル時代のモンゴル命令文の重要性が認識されるに至り、また新発見・新開拓された史料の紹介・研究と同時並行する形で、その研究がめざましく進展している。とはいえ、モンゴル帝国の文書行政システム研究についていうならば、まだ端緒についた段階に過ぎず、立脚すべき基礎的な研究基盤すら構築されていないというのが、偽らざる状況である。本論文は、結果として、その基礎的な研究基盤の一部も提供しうる。

本論文においては、文書原件・石刻・典籍といった形で伝えられる公文書史料を主たる史料とし、その他の各種史料も併用することによって、いわゆる元朝を中心とするモンゴル帝国東部の文書行政システムについて論述した。以下、各章で明らかにしたことをまと

める。

まず、序章においては、筆者の問題意識を述べた上で、本論文の主要史料である元代公文書史料を分類・整理した。

第1章では、モンゴル帝国の文書行政システムに関連する研究史を概観し、展望を述べて課題を設定した。すなわち、「蒙文直訳体」の成立過程・変遷状況、及びモンゴル帝国の文書行政における文書の往来といった運用面の問題における研究の欠落を指摘した。

第2章では、モンゴル帝国東部における文書行政システム運用の一大特色である「蒙文直訳体」を正面からとりあげ、その成立背景と展開を考察した。カルピニの描写する、教皇あての書簡がモンゴル語からラテン語へ翻訳される過程を読み解くことにより、その成立背景として、モンゴルの統治者たちが、命令内容を精確に伝えるために、逐語訳的な翻訳方法を採用していたことを見いだした。また、新出史料「靈巖寺聖旨碑」を用いることによって、フビライ即位直後の、前期直訳体から完全に定型化された直訳体への過渡期の様相を具体的に示した。これによって、定型化された蒙文直訳体の訳語統一化・固定化に至る過程の一端も呈示した。

続いて、文書行政システムの運用において、重要な段階でありながら、従来十分な考察がなされていない、命令文書の伝達・発布について、総合的な検討を行った（第3～5章）。

第3章では、新利用の石刻史料「靈巖寺執照碑」を新たに開拓した。該碑の碑陽に刻される公文書は、命令文書が伝達される一段階、すなわち発令対象者に向けて開読（開封・宣読）される段階を描写している点において、文書行政システムの研究に極めて貴重な情報を提供する。本文書に対する緻密な釈読を呈示した上で、その場面の実態を考察した。また、紛争処理の具体的な過程を追うことにより、当時の地方官府の対応や案件処理のための公文書の往来、証人の召喚や紛争処理における社長の役割を検証した。さらに、モンゴル帝国が寺観宛の命令文書を発令し、寺観がかかる命令文書を刻石・立碑する目的を具体的に実証した。

第4章では、この命令文書の開読について、その形式や手順ならびにそれを取りまく歴史状況を考察した。開読における手続きや儀礼の規定は、その策定の段階で金制に詳しい人員の参与が確認され、その内容もほぼ金制を踏襲していたことを解明した。こうした制度の整備は、フビライ即位後に多方面で展開された国家づくりの一環であった。そして、開読に派遣された使臣が到着の一日前に路に通達し、それを受けて路の人員が城郭の外で出迎えた上で、ともに城内の官府に入って、開読を含む一連の儀礼が挙行される、具体的な流れを確認した。同時に、ハラホト出土文書という生の史料によって、命令文書を受領する地方官府の官員らの行政手続きや儀礼の挙行に関して具体的な行政処理の過程も再構成できた。

第5章では、命令文書の伝達を担った開読使臣の人的構成と、かれらが各地を巡歴する

際の経路を明らかにした。開読使臣は、中国的官制からみれば、本来の職務として日常的に命令文書を担った宣使・奏差・直省舎人といった官吏、及び特定の命令文書の伝達を臨時的に担当した高官の二つの層からなっていた。一方で、モンゴルからみれば、これらすべてをエルチと捉えており、それは職務上の呼称に過ぎない。そして、彼らのうち、ハーンと直接つながりを有するような重要な任務を担当したのが、ヒシク・勲旧の子弟からなる直省舎人とイレギュラーに使臣となった側近であった。開読使臣のとった経路、すなわち命令文書伝達の経路についてもおよそ以下の状況を再構築できた。それは、大都・上都から派遣された使臣が、その途中の各路で開読しつつ、行省の治所に至り、それ以外の路については、行省が別途使臣を派遣するというものであった。同時に、使臣の派遣においては、站赤の負担の効率性が常に優先事項であったこと、さらに、様々な事由によって規定外の地点へ開読に赴く使臣が多かったことも確認できた。

第6章においては、かかる文書行政システムが与えた影響を探るため、中国モスクの石刻史料を基点に、元代イスラームとモンゴルの中華的な文書行政・石刻文化との相関関係を分析した。これによって、中国イスラームがモンゴル帝国の文書行政システム、及びその影響下にあった寺廟における石刻文化の影響を受けて、変容していく過程が明らかとなった。

終章では、結論と今後の展望をまとめた。

以上に、2章の補編を附した。補編第1章は、モンゴル命令文研究の基点となった諸論文も収録する杉山正明『モンゴル帝国と大元ウルス』（京都：京都大学学術出版会、2004年）の書評である。モンゴル命令文研究を始めとするモンゴル時代史研究における杉山正明の功績を確認するとともに、モンゴル帝国史において重要な国号問題に対して筆者の見解を呈示した。補編第2章は、「蒙文直訳体」と共通の言語要素をもつ漢語会話教本、旧本『老乞大』の史料研究を兼ねる。

さて、フビライ政権が文書行政システムを構築するに当たって、基本ラインとして金制を踏襲したことは、第4章において詳述したとおりである。したがって、その制度の大枠は中華王朝のそれに基づいたものであった。その一方で、モンゴル語を始めとする漢語以外の言語や「蒙文直訳体」などの運用に典型的な多言語の状況は、モンゴル帝国ならではの大きな特色をなす。もちろん、五胡諸国から北朝にかけての北中国の政治・社会は多言語状況を呈していたであろう。しかしながら、多言語の文書行政は現存史料からは窺うことができない。この点、唐崩壊後、中国北方に勢力を拡張した契丹（遼）や大金は、契丹文字あるいは女真文字と漢字を併用しており、モンゴルによる中国方面の文書行政のプロトタイプを準備したといえる。しかしながら、行政における多言語文書の運用を再構築するに十分な史料状況にはない。また、これらから類推できる文書行政における多言語運用の普及・拡大・多様性という面でも、モンゴル帝国には到底及ばない。そして、「蒙文直訳

体」という独特の翻訳システムは、モンゴル帝国に至って初めて構築される。モンゴル語から漢語（及び他の言語）への翻訳に際して、内容の改変を最小限に止めるシステムの構築は、モンゴル帝国東部における文書行政システムの一大特徴であろう。同時に、命令文書翻訳のシステム化は、帝国の拡大と多元社会に対する統治の維持を可能ならしめたといっても過言ではない。そして、高麗・朝鮮の通文館・司訳館、大明の四夷館といった各種言語文字の教育・翻訳を掌る機関は、モンゴル帝国のシステムの影響の下に設置されたのであった。

また、かかる命令文書のうち、宗教教団宛ての聖旨・懿旨・令旨・法旨・鈞旨が各地で陸続と石刻化されたことも当該時代の特徴である。それまでも尚書省の牒といった形式の公文書が石刻化されることはあった。しかし、聖旨など統治者のことばがそのまま石刻化されたものは、確認される限り、モンゴル時代に入ってからのものである。仏僧・道士らのみならず、これら宗教を信仰する人びとは、統治者のことばを目の当たりにするようになったわけである。そして、その多くは、「蒙文直訳体」という一風変わった漢語であった。漢語のみを理解する人びとは、しかし、それを聖なることばとして受容したのである。また、これら石碑には、ウイグル文字モンゴル語、パクパ字モンゴル語、パクパ字漢語、アラビクなど漢字・漢語以外の言語文字を含むものもあった。地域によっては、文書行政における多言語状況が地域社会の末端にまで伝わったわけである。

ところで、漢語語法の変遷、あるいは普通話／国語（現代中国語の標準語）であるの前身である北方官話の形成を、漢語とモンゴル語を中心とするアルタイ諸語との接触の観点から捉える見方がある。これは、五胡十六国～南北朝時代、さらには五代・遼金元時代、そして清代と長いスパンにわたる多民族社会と多言語状況の展開から捉えるべき現象である。実際に、モンゴル登場に至るまでの五胡十六国～南北朝時代、五代・遼金時代の多元社会の展開によって、北方漢語が断続的に変容し続けたという観点、当時の北方漢語が「蒙文直訳体」を生成・受容する素地をあったとする知見も提出されている。他方、「蒙文直訳体」のようにシステム化された翻訳文体の運用が、漢語史の展開において果たした役割とその影響にも目を配るべきであろう。

最後に、本論文の意義を、今後の展望を交えつつ、具体的にまとめておく。

第一に、モンゴル帝国東部における文書行政システムを考察することによって、「蒙文直訳体」及びその漢語への影響を検討するために必要な研究基盤を構築することができた。

「蒙文直訳体」をめぐる問題は、当時の多民族・多言語社会、民族接触とそれによって生じる接触言語の問題、異文化間のコミュニケーションの問題に深く関わってくる。本論文では、問題の出発点となった「蒙文直訳体」の漢語への影響を具体的に解明することを目的とするものではないが、モンゴル語世界・漢語世界間の橋渡し言語としての「蒙文直訳体」の成立と展開を検討することによって、モンゴル時代における接触言語や異文化間コ

コミュニケーション問題への展望も見いだすことができた。

第二に、本論文において解明されたモンゴル帝国東部における文書行政システムの運用状況も、モンゴル帝国史研究、中国近世史研究において重要な成果であると考えられる。モンゴル時代命令文研究が進展している割には、その運用母体となったシステムや運用の実態については、基礎的な制度研究すらなされていない。広大な版図を有したモンゴル帝国において、統治情報の伝達を担う文書行政システムは、その統治システムの根幹に位置づけられ、その解明は焦眉の課題である。また、中国史の視角からみると、本論文は、「元代中国について、ごくあたりまえの中国史の研究が必要」とされる状況も補うことができた。モンゴル政権は、独自の律令を制定することではなく、元代の法制・行政においては、ハーンがモンゴル語で発するジャルリク（聖旨）を頂点とする命令文書が法の根源であった。この意味において、唐宋変革を経て確立したとされる近世中国の皇帝独裁政治は、元代において一つの劃期を迎えたと捉えることも可能であろう。中国王朝の統治システムの特質解明において、元代は、軽視できない重要な転換点であるにもかかわらず、その研究基盤整備は最も遅れている。本論文は、元代統治システム解明のための重要な基礎作業でもある。

第三に、本論文は、多民族・多言語社会統治システム解明の一環にも位置づけられる。筆者は、モンゴル帝国の多民族・多言語社会に関心を抱き、その統治システムを解明すべく、「色目人」の問題を手がかりとして、蒙古・色目・漢人・南人の区分設定の問題、戸籍制度、税役制度、官僚任用制度など検討し、その成果を学術誌に発表してきた。その過程を通じて、文書行政システムが、多民族・多言語社会統治システムの重要な位置を占めること、当時の多民族・多言語社会の諸相を反映していることに注目するに至った。具体的には、「蒙文直訳体」の言語とその運用状況に、これらを見いだすものである。本論文は、モンゴル帝国の文書行政システムにおける多言語運用状況が具現化した一端に考察を加えた。これによって、多元社会の展開の一事例を呈示することができた。そして、モンゴル帝国の文書行政システムは、他地域にも波及し、帝国瓦解後も継承された。そのシステムは、モンゴル帝国の統治を支えただけでなく、後世の統治システムにも大きな遺産を遺したのである。